

# 大阪市立自然科学博物館館報

5

大阪市西区靱 2 丁目52

大阪市立自然科学博物館

昭和47年 8 月31日発行

## 目 次

---

自然史博物館のゆくえ	1
I 庶務報告	4
II 収集保管事業	8
III 調査研究事業	13
IV 展覧事業	15
V 普及指導事業	16
VI 新館建設事業	18

---

# 自然史博物館のゆくえ

館 長 千 地 万 造

——「市政に夢を。水の都、緑の並木、文化の町」というのが私のかねての念願であります。60年代の後半はまずその基礎づくりの期間でありました。そして、いよいよ70年代に入り、人間性回復ということが全国的、世界的な規模で人々の意識に上り始めたのであります。時たまたま私も3期目を迎えて、今日までの基盤づくりの成功を喜ばしく思いますと同時に、この基盤の上にいよいよ念願の文化振興の種をまく時期が到来してきたことを痛感いたしましたのであります。

——市民が気軽に美術や音楽や演劇を鑑賞したり、また自ら参加し、自ら創造活動ができるようなギャラリーやホールもほしいものであります。

——こんど新しく長居公園に作ることになりました自然史博物館は、世界的にもユニークな博物館であります。このような国内はもちろん、世界の人々をひきつけるだけの魅力のある、すぐれたミュージアムやホールもぜひ持ちたいものであります。風格のある情緒豊かな人間都市を作るためには、古い文化財や伝統芸術を大切にする一方、新しい文化の芽も育てていかなければなりません。

——以上は故中馬馨・前市長が去年11月、近く開かれる予定になっていた大阪市文化問題推進懇話会（仮称）に送るため、死の床にありながら想を練られていたメッセージの草案（中馬市長の絶筆となった）の一部である。

中馬さんが死の直前まで、その完成を想い、新しい文化の芽として夢見ておられた自然史博物館は、本年2月着工、工事は順調に進み、いまや外観が次第に明らかになりつつある。建設計画はすでに昭和42年からあっためられつつあったが、いよいよ正式にスタートしたのは昭和44年であった。建設基本構想審議委員会が設けられ、昭和45年には市民・教育者・学者の代表の積極的な参加をえて建設委員会が発足し、一方、大阪市では教育、建築、公園の各部局が連絡会を持ち計画の具体化を進めた。よく世間では「お役所の縄張り根性」ということが言われるが、行政・事務にうとい私たちがおかした数多くの不都合にもかかわらず、すべての関係者が情熱をかたむけて協力して下さった結果が、着々と実を結びつつあるのである。

この博物館を中馬さんは世界的にもユニークなものと言っておられる。総事業費約10億。公立自然史博物館としてはわが国随一の規模とはいえ、世界の大博物館にくらべるととるに足らぬ程の小規模のものである。国立科学博物館とくらべても1/3に満たぬこの博物館の何をもって世界的にユニークと言えるのであろうか。日に日に完成に近づきつつある博物館が真に新しい文化の芽を育てる施設であり、世界的にもユニークな博物館としてうぶ声をあげることができるかどうか。いよいよ責任はわれわれ自然科学博物館のスタッフがとらねばならない。

ここでいう自然史とはナチュラル・ヒストリーのことである。これはまた博物学とも訳されている。ナチュラル・ヒストリーは次のように説明されている。

NATURAL HISTORY, in this wide sense, that department of knowledge which comprehends the sciences of zoology and botany, chemistry, natural philosophy or physics, geology, paleontology and mineralogy. It is now, however, commonly used to denote collectively the sciences of botany and zoology, or these together with geology, mineralogy and paleontology, exclusive of physics and chemistry, and it is sometime restricted to denote the science of zoology alone. (エンサイクロペディア・アメリカーナ 1962)

すなわち、広義には動物学、植物学、化学、物理学、地質学、古生物学、鉱物学などを包含した知識の分野であるが、現在では化学・物理学は除外されている。ときには動物学のみを指すこともあるわけである。

ナチュラル・ヒストリーという語が最初に用いられたのはローマ時代の末期である。当時の偉大な自然研究者プリニー (Cains Pliny A.D. 23—79) はポンペイの町を埋めつくしたヴェスヴィウス火山の噴火を観察に行き、A.D. 79年8月遭難したのであるが、その2年前の A.D. 77年彼は "Natural History" と題する全37巻の大著を公にしている。この著書は雑多の事実を、連絡も秩序もなしにいっしょにしたようなもの (小林英夫 1954: 科学史大系 VIII・中教出版) といわれ、内容として、地球や天体の数理的記載、地理、民族、動物、植物、医薬、絵具、石材、宝石などがとりあつかわれている。(エンサイクロペディア・ブリタニカ 1965) いいかえれば、人間をとりまくすべての自然的な事物とその産物を対象としてそれを書きしるしたものがナチュラル・ヒストリーであったとすることができる。ここにいうヒストリーとは歴史ではなく、記載したものの一学という意味をもっているのであろう。

このような素朴な自然物の記載から始まったナチュラル・ヒストリーは次第に学問的体系をととのえ、自然界に存在する多種多様な事物を一定の秩序の下に配して理解する博物学へと発展した。動物や植物、あるいは化石や鉱物・岩石などを、その形態や性状、組成といったものを基準に分類し、相互の類縁関係を明らかにすること、そして、それらが人間の生活にいかに関与するかを見出すことが、博物学の非常に重要な部分を占めるに至った。人間の生活が自然に強く依存していたころ (もちろん現在もそうであるが) には、狩猟・牧畜・農耕あるいは、農業・林業・漁業・鉱業などを効果的に行うためには自然の事物の性状をよく知り、それを識別することが必要なわけである。しかし自然物の類縁関係を明らかにするには当然のことながら歴史的な見方を必要とするようになってくる。たとえば、動物の分類には進化を無視することができないし、その地理的分布も歴史的に成立したものである。自然の事物の記載に始まった ナチュラル・ヒストリーが、博物学となった現在では歴史科学的要素が強くなってきているわけである。

われわれ人間は自然の中に歴史的に生れ、自然にはたらしかけ、自然を利用して生活を豊かにし、文化を築き上げてきたのであるが、昔は人間の力も弱かったために、人間の利用によって破壊された自然は自らの力でそれを修復しつつ、バランスを保ちながら、ゆるやかに自らを変化させて来たということが出来る。しかし、現在の強大な科学技術は生産と利潤の追求のために、あまりにも急激に、しかも大規模に自然を破壊しつつあることは周知の事実である。これは金の卵を生む鶏の腹を裂くのと一緒である。自然を豊かに保ちながら、しかも有効な利用方法を探究することを現在のナチュラル・ヒストリーは責務としなければならないと思うのである。そのためにはわれわれは自然の歴史 (ヒストリー・オブ・ネイチャー) にもっともっと学ぶ必要があるであろう。

以上を要約すると、従来ナチュラル・ヒストリーの範疇に入れられている動物学・植物学・地質学・古生物学・鉱物学のもっている歴史科学的側面を意識的に強調しなければならぬということと共に、それらの総合した“自然と人間とのかかわりとその歴史の科学”を創ってゆかなければならないと思うのである。自然に関する研究を通じて資料の収集しそれを後世に残すと共に、“自然と人間のかかわりとその歴史の科学”を通じて“人間にとって自然とは何か”という理解を広め、自然そのものを次の世代へと遺すことが現代におけるナチュラルリストの社会的責任ではなかろうか。いままさに産声をあげようとしているナチュラル・ヒストリー・ミュージアムを「博物学」博物館と呼ばず、「自然科学」博物館あるいは「自然の歴史」博物館でもなく、自然史博物館と名付けるには、このようなわれわれの願いがこめられているのである。中馬さんがあえて世界的にユニークな博物館と言われたのは、このような願いへの共感によるものであったと私は思う。そして、自然と人間との深いかかわりあいとその歴史を博物館とそれをとり囲む広大な自然植物園の中で肌で感じ、理解することによって、自然を愛し大切にす豊かな人間性、それを新しい文化の芽として育てゆくことを希っておられたのであろう。

とはいえ、現在のわれわれは余りにも力不足である。おそらく掘り下げ方の不十分な、そしてまた技術的にも稚拙な展示になってしまう恐れは十分にある。化石は化石、昆虫は昆虫といった従来通りの百科事典的展示であれば、われわれが過去約20年にわたって収集した標本と蓄えた知識に加えて、日本のディスプレイ技術をもってすれば、まとまった見栄えのする展示室を造り上げることは出来る。しかし、いまここで私たちは安易な道をとるべきではない。知識の不十分さは補うことが出来るし、間違いが明らかになれば正せばよい。標本の不足は追加すればよい。展示ケースはあとあと金をかければ立派なものに更新することが出来る。新しい出発にあたって、われわれの目指す方向だけはしっかり見つめて歩き出したいものである。

# I 庶務報告

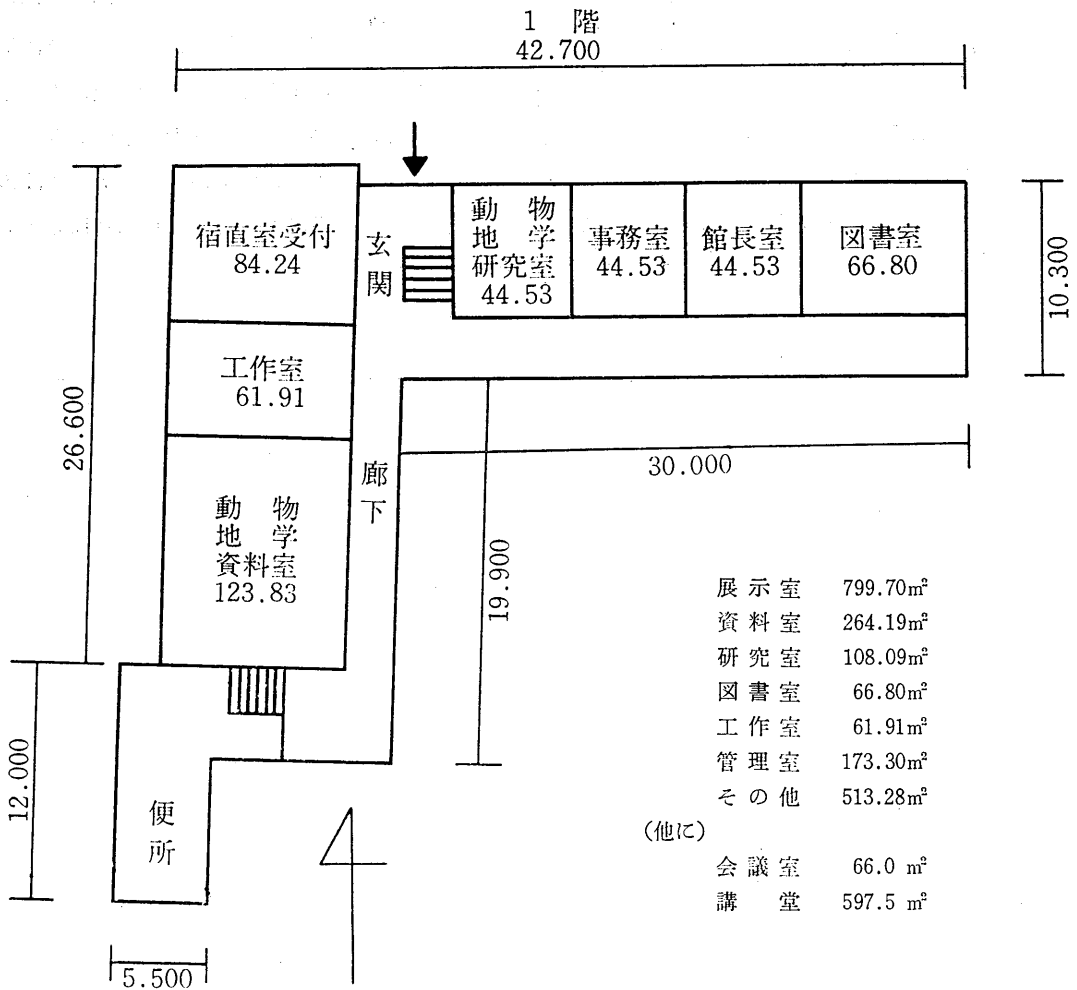
## 1. 沿革

昭和24年11月8日—自然科学博物館開設準備委員会設置  
 昭和25年4月1日—自然科学博物館費予算に計上  
 昭和25年11月10日—市立美術館2階廊下1部に展示開始  
 昭和27年4月17日—博物館相当施設に指定  
 昭和27年6月2日—大阪市立自然科学博物館条例および規則制定  
 昭和27年7月10日—博物館法第10条により登録第2号  
 昭和32年6月7日—市立美術館より現在地に移転  
 昭和33年1月13日—開館  
 昭和39年3月31日—市条例および規則改正現在に至る

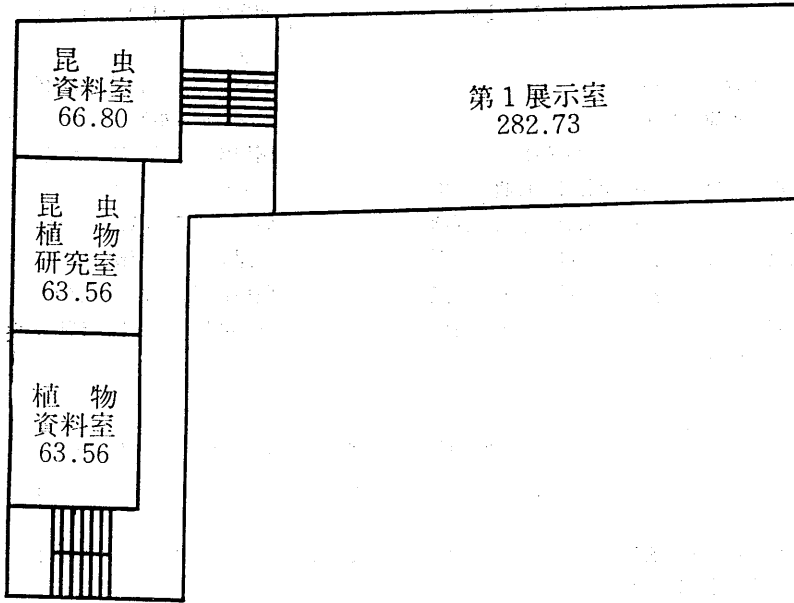
## 2. 現況

- (1) 所在地  
大阪市西区靱2丁目52
- (2) 施設  
敷地面積—2,401.79㎡  
延床面積—1,987.27㎡  
建築面積— 764.09㎡
- (3) 開館時間・入場料・休館日  
開館時間—午前9時～午後5時  
入場料—無料  
休館日—毎週月曜日・毎月末日・国民の祝祭日  
年末年始(12月28日～1月4日)  
他に展示室の整備のため臨時休館することがある。

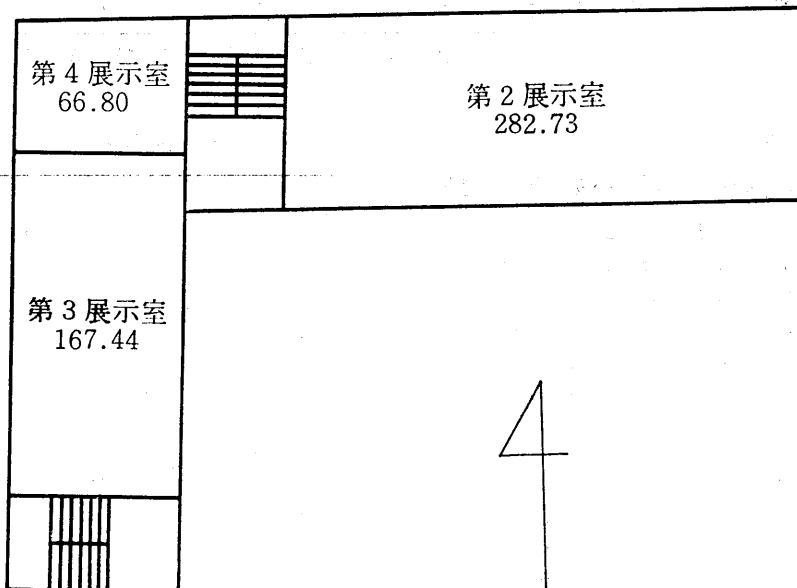
自然科学博物館平面図



2 階



3 階



### 3. 職員および人事

(1) 職員の配置 ※ ( ) 内は人数

館長(1)―副館長(1)―

- ―主査(1)―
  - ―事務吏員(2)
  - ―用務員(2)
  - ―現業員(1)
- ―主任学芸員(2)―技術吏員(3)

(2) 職員名簿

館長 千地 万造

副館長 小笠原 哲夫

(庶務係)

(学芸係)

主査 浮田 哲 主任学芸員 日浦 勇  
 事務吏員 外嶋 実 主任学芸員 柴田 保彦  
 事務吏員 倉橋 英和 技術吏員 瀬戸 剛  
 用務員 内本 光次 技術吏員 宮武 頼夫  
 用務員 大谷 春雄 技術吏員 両角 芳郎  
 現業員 池田 昭利

(3) 職員の異動

ア. 異動(昭和46年4月1日～昭和47年3月31日)

昭和46年6月17日 小笠原哲夫 社会教育部主幹より当館副館長に就任  
 昭和46年6月30日 浮田哲 主査に就任(名称変更)  
 昭和46年6月30日 日浦勇 主任学芸員に就任(名称変更)  
 昭和46年7月31日 渡辺幸雄 当館庶務係より都市再開発局に転出  
 昭和46年7月31日 倉橋英和 都島区役所総務課より当館庶務係へ  
 昭和46年8月31日 竹本婦美子 願により退職  
 昭和46年10月1日 柴田保彦 主任学芸員に就任。

イ. 定数の推移

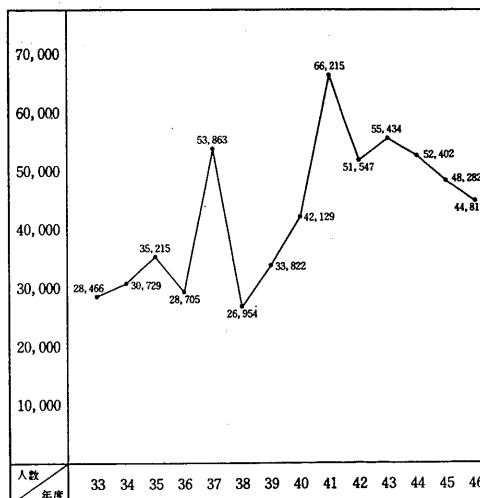
職 種	年 度														
	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	
館 長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
副 館 長														1	
係 長(主 査)	(1)	(1)	(1)	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	(1)	
主 任 学 芸 員														2	
事 務 員	事務吏員	2	2	1	1	2	2	3	2	2	1	2	2	1	2
	事務員	1	1	2	2	1	1			1	1	1	1	2	
学 芸 員	技術吏員	4	4	4	3	3	3	4	3	3	3	4	4	4	3
	技術員	1	1	1	1	1	1								
業 務 員	用務員	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	現業員						1	1	1	1	1	1	1	1	1
嘱 託	2	2	2	2	2			1	1	1					
合 計	14	14	14	14	14	13	13	12	13	12	13	13	13	13	

### 4. 入館者

(1) 昭和46年度入館者数集計

種別 月	団 体	幼 児 小 学 生	中 学 生	高 校 大 学 生	一 般	合 計	備 考
4	553	1,912	438	350	2,110	5,363	
5	587	1,254	329	284	1,571	4,025	
6	1,152	815	245	276	923	3,411	
7	138	954	354	211	790	2,447	
8	816	1,580	804	382	1,274	4,856	
9	795	963	278	225	757	3,018	
10	829	925	191	227	832	3,004	
11	1,097	848	221	214	839	3,219	
12	568	441	103	150	400	1,662	
1	400	860	113	168	610	2,151	
2	3,088	1,532	176	212	1,341	6,349	
3	2,398	1,278	336	291	1,009	5,312	
合計	12,421	13,362	3,588	2,990	12,456	44,817	

(2) 入館者数年度別推移



※ 新館建設関係事務繁忙のため特別展は開催せず。



5. 予 算

(1) 昭和46年度予算

歳 入	
博物館設備費補助金	80,000円
合 計	80,000円
歳 出	
(第1部)	
展覧事業費	1,227,000円
調査研究事業費	1,197,000円
資料収集保管事業費	1,366,000円

普及指導事業費	286,000円
整備充実費	512,000円
一般維持管理費	979,000円
小 計	5,567,000円
(第2部)	
自然史博物館建設事業費	100,000,000円
自然科学博物館整備費	3,000,000円
小 計	103,000,000円
合 計	108,567,000円
但し、人件費をのぞく。	

(2) 予算年度別推移

(単位千円)

年 度	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
歳出予算												
第 1 部	3,283	4,260	4,243	4,193	4,171	3,463	3,345	3,827	4,160	4,347	5,656	5,567
第 2 部	170	5,000	600	0	150	1,000	1,000	1,310	1,500	1,730	2,000	103,000
合 計	3,453	9,260	4,834	4,193	4,321	4,463	4,345	5,137	5,660	6,077	7,656	108,567

※ 46年度予算には自然史博物館建設事業費を含む。

6. 海外出張一覧表 (昭和33年度～昭和46年度)

行 先	期 間	氏 名	用 件
ニューカレドニア 及 属 島	昭和33年9月2日～ 昭和33年12月27日	筒井嘉隆 柴田保彦	メラネシア学術調査
ア メ リ カ	昭和36年8月17日～ 昭和36年10月2日	筒井嘉隆	第10回太平洋学術会議出席及アメリカ合衆国博物館視察
インド、セイロン 及 東南アジア	昭和38年12月10日～ 昭和39年1月19日	千地万造	第22回国際地質学会議出席及インド、セイロン、東南アジア博物館視察
東 南 ア ジ ア	昭和43年7月15日～ 昭和43年9月20日	波田重熙	大阪市立大学第5次東南アジア学術調査隊隊員として参加
フ ィ リ ピ ン	昭和44年6月29日～ 昭和44年7月15日	千地万造	フィリピン群島自然史調査
フ ィ リ ピ ン	昭和44年11月16日～ 昭和44年12月25日	日浦勇剛 瀬戸武頼	フィリピン群島自然史調査
ア メ リ カ	昭和45年10月14日～ 昭和45年10月23日	千地万造	アメリカの博物館との標本交換・購入交渉
台 湾	昭和46年6月15日～ 昭和46年6月30日	宮武頼夫	台湾昆虫相調査
ア メ リ カ	昭和46年9月6日～ 昭和46年9月20日	千地万造	アメリカの博物館との標本交換・購入交渉

## Ⅱ 収 集 保 管 事 業

### 1. 昭和46年度収集保管事業概要

#### (1) 地学部門

##### ア. 購入標本

火山毛, リシア電気石, 始新世魚化石ほか, 岩石, 鉱物, 化石標本	18点	真鍋製作所
火山弾, 閃亜鉛鉱, ベレムナイトほか, 岩石, 鉱物 化石標本	18点	日本地科学社
水晶巨晶(緑色電気石入り)	1点	篠原貿易
アロザウルス全身骨格複製	1組	安宅産業
トリケラトプス頭部複製標本	1点	安宅産業

##### イ. 主な寄贈標本

照来層群の植物化石	11点	衣笠弘直氏
ピラミットの貨幣石	10点	粉川昭平氏
ノルウェーシルル紀三葉虫など	15点	粉川昭平氏
ドイツジュラ紀グリフェラなど	11点	伊藤孝巳氏
ブラジル産硬鱗魚化石	1点	ブラジル久保田鉄工
東南アジアの化石(ベレロフォン, クラライアなど)	20点	波田重熙氏

##### ウ. 館員による採集

- 5月16日 二上山の岩石
- 8月5～9日 島根県仁摩川合層の貝化石など
- 12月15日 京都府宇治原綴喜層群の貝化石
- 2月7～10日 静岡県掛川市周辺の微化石
- 3月31日 泉北ニュータウン大阪層群材化石発掘

##### エ. 東洋象の発掘

- 4月3・4日 枚方市宮之下町にて.
- 3月17日, 小学5年生の中 裕香ちゃんによって発

見された固い骨片のようなものが東洋象 *Stegodon orientalis* の上顎臼歯化石であったことに端を発した枚方の東洋象の発掘が, 博物館と枚方市教育委員会の主催で行われた。発掘には枚方の先生方はじめ近畿地方の第四紀研究者, 高校生, 報道関係者, それに, ニュースを知ってかけつけた小, 中学生や近所の人など(博物館からは10名参加)100名余りも集り, こうした発掘に対する関心の高さを示した。結果的には予備発掘で発見された下顎臼歯と後頭部化石以外には追加発掘できず, 一頭分まるまる発掘したいという望みは達せられなかったが, 発掘やその後の展示会(枚方市, 羽田空港ビルの「失われた生物展」)を通じて, 多くの人に象化石に関する知識を普及できたし, 又博物館としてこうした発掘を計画する場合の多くの教訓を得ることができた(この発掘のくわしい様子は *Nature Study* 17巻5号に特集されているので, その方を参照されたい; ✓写真は東洋象発掘のようす)。

#### (2) 動物学部門

##### ア. 購入標本

ヘビ類標本 13点

##### イ. 主な寄贈標本

沖縄県産両生爬虫類	10点	高須賀信悟氏
エゾアカガエル	8点	安積 順一氏
徳之島産ハブ	1点	中島 昇一氏
市内産ジムグリ	1点	斉藤 的士氏
カリマンタン産オオトカゲ	1点	長尾 耐而氏



市内淀川の淡水魚	145点	柳 昌之氏
"    エビ	10点	"
カバイロカノコ	3点	辻本 修氏
徳之島産ヒャン	1点	田畑 哲氏
オショロコマ	3点	谷 幸三氏
能勢産タゴガエル	1点	前田 満氏
神津島産オカダトカゲ	1点	横須賀市博物館
箕面産シロマダラ	1点	河野 洋氏
台湾産ニホンカジカガエル	4点	倉本 満氏
宮崎県産両生類	5点	磯崎 恵明氏
ポーランド産カエル	3点	粉川 昭平氏
デンマーク産ヒル	2点	"
ヨーロッパ産貝類	40点	"
南シナ海産魚類	2点	小郷 一三氏
カイロウドウケツ	1点	"
小笠原産オオヒキガエル	12点	西平 守孝氏
北海産産ネズミ3種	8点	館山 一郎氏
フィリピン産マメシカ頭骨	4点	本田 泰造氏
和歌山産ゾウリエビ・セミエビ	3点	久保田弥生氏
ゼブラガニ・奇型アワビ	各1点	吉田 謙氏
男女群島産トカゲ	2点	原 幸治氏
蘭嶼産ヤモリ2種	4点	松本幸太郎氏
蘭嶼産ハクビシン頭骨	26点	"
"    毛皮	1点	"
ツシマサンショウウオ	2点	米田 文泰氏
各地産両生爬虫類	13点	西川 喜朗氏
"	2点	谷 幸三氏
"	9点	春沢圭太郎氏
"	19点	土井仲次郎氏
三重県カニ	8点	"
各地産両生爬虫類	59点	桂 孝次郎氏
淡路産淡水エビ	4点	"
三重県産ヒバカリ	1点	道盛 正樹氏

ウ. 館員の出張採集

五島列島・霧島山・奄美大島などの両生爬虫類標本など。

(3) 昆虫学部門

ア. 購入標本

アフリカ産フタオチョウ	40点
ボルネオ・キナバル山産蝶	5点
外国産蝶・甲虫標本	22点

イ. 主な寄贈標本(一部交換を含む, 受入順)

大阪産ウンカなど	6点	春沢圭太郎氏
セミ幼虫	2点	桂 孝次郎氏
近畿産昆虫	52点	春沢圭太郎氏
沖縄産蝶	4点	高須賀信悟氏
近畿産甲虫・蝶	14点	一井 弘行氏

オサムシ標本	1点	岩本 勝彦氏
カメムシ類標本	157点	三宅 義一氏
山形産蝶	12点	藤田 幸夫氏
台湾産蛾等	32点	林 靖彦氏
蝶の異常型標本	3点	五十嵐英二氏
近畿地方産トンボ	10点	一井 弘行氏
信楽・茨木産トンボ	14点	桂 孝次郎氏
北海道・新潟産昆虫	102点	春沢圭太郎氏
カタキカタビロハナカミキリ	1点	阿部 利一氏
脈翅類標本	1点	北川 一馬氏
ハチ類標本	1点	一井 弘行氏
北海道産昆虫	1781点	
谷 幸三氏・北川一馬氏・一井弘行氏		
氷ノ山・扇山・蒜山のトンボ	13点	
西川喜朗氏・桂孝次郎氏		

中国地方産甲虫	38点	衣笠 弘直氏
大阪城産トンボ	8点	一井 弘行氏
四国産昆虫	8点	波田 重熙氏
台湾産半翅類・甲虫	113点	大阪甲虫同好会
韓国産蝶	54点	申 裕恒氏
近畿産シリアゲムシ類	62点	谷 幸三氏
鳥取県・岡山県産昆虫	43点	衣笠 弘直氏
近畿産 <i>Pieris</i> 属標本	161点	谷 幸三氏
日本産シリアゲムシ類	163点	
谷 幸三氏・富永 修氏		
大阪産蝶	7点	春沢圭太郎氏
霧島山の昆虫	50点	西川 喜朗氏
北米及びパナマ産・日本産蝶	29点	多田 豊氏

ウ. 館員による採集出張と主な採集標本

日本産昆虫の平均的収集, 大阪産昆虫の完全な収集等の目的で, 担当学芸員(日浦・宮武)が行なった出張は次の通りである。便宜上, 調査研究のための出張及び普及行事やその予備調査の際の出張も含めて記述する。(担当者名は, H-日浦, M-宮武と略する)

46年

4月11日	奈良県中峰山	一般昆虫(H・M)
4月14日	富田林市喜志	昆虫相調査(H)
4月19日	河内長野市蔵王谷	昆虫相調査(H・M)
4月25日	河内長野市岩瀬~小深	一般昆虫(H・M)
4月28日	金剛山	昆虫相調査(H)
5月9日	武田尾	水生昆虫(H・M)
5月10日	桜井市多武峰	水生昆虫(H)
5月12日	西宮東山口町	一般昆虫(H・M)
5月16日	淡路島	トンボ等昆虫相調査(H・M)
5月23日	滋賀県甲賀郡信楽	昆虫相調査(H)
5月24日	桜井市多武峰	水生昆虫等昆虫相調査(H・M)

5月30日 京都府船井郡園部 一般昆虫 (H)  
 6月6日 西宮市塩瀬町尼子谷 昆虫相調査 (M)  
 6月13~28日 台湾 同翅目等昆虫相調査 (M)  
 6月13日 金剛山 一般昆虫 (H)  
 7月11日 箕面 一般昆虫 (M)  
 7月10~11日 京都府北桑田郡芦生 昆虫相調査 (H)  
 7月17日 能勢初谷溪谷 昆虫相調査 (M)  
 7月25~28日 北海道定山溪・空沼岳等 一般昆虫 (M)  
 8月4日 能勢初谷溪谷 一般昆虫 (M)  
 8月8日 滋賀県彦根市 昆虫相調査 (H)  
 8月12~13日 紀見峠~岩湧山 一般昆虫 (M)  
 8月28日 奈良公園 鳴く虫等 (H・M)  
 9月4・8日 藤井寺市道明寺 鳴く虫等 (H・M)  
 9月16日 奈良県北葛城郡磐城~新城町 蝶・一般昆虫 (M)  
 9月27日 能勢初谷溪谷 昆虫相調査 (M)  
 10月1日 芦屋市イモリ池 一般昆虫 (M)  
 10月3日 福知山市(土師・石原・多保市・長田) トンボ類調査 (M)  
 10月6・17日 貝塚市三ツ松付近 一般昆虫 (M)  
 10月7日 神戸市道場~鎌倉峡 昆虫相調査 (M)  
 10月10~13日 宮崎市(市内・双石山・日向住吉等) 一般昆虫 (M)  
 10月20日 西宮市船坂谷 水生昆虫相調査 (H・M)  
 10月24日 能勢初谷溪谷 虫こぶ等 (H)  
 11月5日 西宮市仁川上流 水生昆虫相調査 (H・M)  
 11月9日 西宮市仁川下流 水生昆虫相調査 (M)  
 11月18日 能勢初谷~妙見山 一般昆虫 (M)  
 11月25日・12月5日 桜井市朝倉 越冬昆虫 (H・M)  
 12月20日 西宮市甲山~奥池 昆虫相調査 (H)  
 12月22日 西宮市船坂~奥池 昆虫相調査 (M)  
 12月24日 西宮市山口町~神戸市 昆虫相調査 (H)

47年  
 1月6日 武田尾~道場 昆虫相調査 (M)  
 3月10日 京都市山科 昆虫相調査 (H)  
 3月12日 西宮市武田尾 越冬昆虫相調査 (H)  
 3月26日 西宮市甲山周辺 昆虫相調査 (H・M)

他に主なものとして、柴田学芸員の採集による五島列島産昆虫(46年5月29日~6月7日)354点、霧島山産昆虫(46年7月25日~8月2日)297点、奄美大島産昆虫(47年1月8~12日)105点、京都府相楽郡精華町産昆虫多数がある。

(4) 植物部門

ア. 購入標本

ボルネオ産シダ植物 5点  
 北海道産など植物標本 400点  
 菌類模型 11点

イ. 主な寄贈標本

大阪府能勢町産エンコウソウなど植物標本 3点 森本 弋氏  
 カブラアセタケ標本 1点 上田 俊穂氏  
 植物標本 40点 村田 源氏  
 田辺市帰化植物など植物標本 40点 山本 虎夫氏  
 群馬・兵庫県産など植物標本 58点 桑島 正二氏  
 ボルネオ・キナバル産シダ植物 400点 堀田 満氏  
 宮崎県産ミヤマベニシダ標本 1点 滝 一郎氏  
 和歌山県産ヒメイワカガミ標本 1点 真砂 久哉氏  
 京都市・大津市産サギソウ 2点 一井 弘行氏  
 タイワンスギなど台湾産針葉樹標本 4点 廖 日京氏  
 琉球産シダ植物標本 73点 生田 耕蔵氏  
 兵庫県産植物標本 2点 斎藤 芳樹氏  
 徳島県産イワダレヒトツバ標本 1点 高橋 洋子氏  
 植物標本 3点 上田 俊穂氏  
 菌類標本 2点 上田 俊穂氏  
 近畿・東北地方産植物標本 50点 松本 邦夫氏  
 大阪府和泉葛城山産植物標本 58点 御影 雅幸氏  
 和歌山県産シダ植物 2点 真砂 久哉氏  
 琉球産シダ植物標本 2点 松田 隆一氏  
 シダ植物標本(主に静岡県産) 178点 富士本久登氏  
 和歌山県産シダ植物 10点 真砂 久哉氏  
 菌類標本 11点 上田 俊穂氏  
 琉球産植物標本(主にシダ植物) 57点 白岩 卓己氏  
 和歌山県産シダ植物 10点 真砂 久哉氏  
 和歌山県植物標本 3点 山元 晃氏  
 オヘビイチゴ奇型標本 1点 脇川 秀子氏  
 兵庫県赤穂産植物標本 2点 長谷川 甫氏  
 大阪市産スズメガヤ 1点 池尻多喜男氏  
 菌類標本 19点 上田 俊穂氏  
 和歌山県産植物標本 2点 山元 晃氏  
 大阪府金剛山産シダ植物標本 3点 富士本久登氏  
 カナダ産 Conptonia 標本 1点 粉川 昭平氏  
 三重県イヌケホシダ標本 2点 岩井 信市氏  
 沖永良部島産カレンコアマシダ標本 1点 志村 義雄氏  
 大阪府茨木市産アマナズナ 1点 竹田 恭子氏  
 ヨーロッパ産植物標本 161点 粉川 昭平氏  
 小豆島産ツチアケビ 1点 樋出 誠詢氏  
 東北地方産植物標本 129点 桑島 正二氏  
 和歌山県産イソスギナ・フデノホ 2点 山本 虎夫氏  
 植物標本 80点 村田 源氏  
 和歌山県産植物標本 68点 中島徳一郎氏  
 大阪府および近県産植物標本 30点 中西 定雄氏  
 京都産ミヤコアオイ標本 2点 春沢圭太郎氏  
 ヨーロッパ産シダ植物標本 3点 吉年 祐一氏  
 長野県産イネ科植物標本 2点 松本 邦夫氏

北海道産ニオイシダ標本 1点 山本 虎夫氏  
 北アメリカ産スギカズラおよびマンネンスギの  
 配偶体標本 2点 粉川 昭平氏  
 三重県産ミミカキタケ標本 1点 粉川 昭平氏  
 北アメリカ産植物標本 約100点 篠崎 吉郎氏  
 近畿地方産シダ植物標本 59点 生田 耕蔵氏  
 和歌山県産キイウマノミツバ標本1点 谷口 丈夫氏  
 和歌山県産植物 3点 平野 弘二氏  
 高知県産クロガネシダ・コウラボシ

2点 田中 義信氏  
 近畿地方産植物標本 70点 児玉 務氏  
 琉球産シダ植物標本 2点 安木 五夫氏

ウ. 館員の採集出張

4月26-27日 三重県藤原岳  
 5月16日 兵庫県砥ノ峯高原  
 5月22-24日 岐阜県御前山および中山七里  
 6月13日 大阪府・奈良県・金剛山  
 8月28日 " " "  
 6月21日 兵庫県赤穂市  
 8月3-4日 宮崎東および尾鈴山  
 8月18-19日 和歌山県西牟婁郡大塔村  
 10月10日 大阪市南港埋立地  
 その他西宮市各地

(5) 資料交換購入のための海外出張(千地館長)

ア. 期間

昭和46年9月6日~9月25日

イ. 行先

- i) Thomas Burke Memorial Washington State Museum, University of Washington (シアトル)
- ii) U. S. National Museum (ワシントン D.C.)
- iii) American Museum of Natural History (ニュー・ヨーク)
- iv) Carnegie Museum (ピッツバーグ)
- v) Natural History Museum, University of Utah (ソールト・レーク・シティ)
- vi) Los Angeles County Museum of Natural History (ロスアンゼルス)

ウ. 目的

昨年にひきつづき、新館展示資料充実のため、恐竜骨格レプリカの製作を依頼し、合せて、古生物化石を入手。ユタ州立博物館では昨年製作を依頼したアロザウルス石膏模型が出来たので、その組立て方法を調査、梱包・発送に立会った。

エ. 結果

今回新たに製作を依頼したレプリカは次のとおりである。

Diplodocus carnegii (skull)  
 Camarasaurus lenus (skull)  
 Diplacodon progressum (skull)

以上 Carnegie Museum

Eryops (skeleton)  
 Tyrannosaurus (skull)  
 Stenopterygius (plaque)  
 Cynognathus (skeleton)  
 Lycoenops (skeleton)  
 Stegosaurus (skeleton)  
 Dimetolodon (skeleton)  
 Nyctosaurus (plaque)  
 Brontosaurus (foot prints)  
 Allosaurus (foot prints)  
 Duckbilled Dinosaur (skull)  
 Protoceratops (Nest with 15 eggs)  
 Hemicyclaspis  
 Cephalaspis  
 Pteraspis  
 Coccosteus

以上 American Museum of Nat. Hist.

Diadectes (skeleton)  
 Seymouria (skeleton)  
 Desmostylus (skull)

以上 U. S. National Museum

Psilophyton  
 Lepidodendron  
 Sigillaria  
 Calamites  
 Sphenophyllum  
 Stauropteris  
 Etopleris  
 Lyginopteris  
 Medullosa  
 Cordaites  
 Lepidodendron  
 Sigillaria  
 Neuropteris  
 Cordaites  
 Medullosa

以上 Carnegie Museum

なお、Los Angeles County Museum とはランチョ・ラ・ブレア産 Smilodon 骨格標本とマチカネワニの交換について話合ったが、現在同館がランチョ・ラ・ブレアの再調査を行っており、今後の進捗状況の変化も考慮して、交渉を継続することにした。

2. 現有資料数

(1) 地学部門 (昭和47年3月31日現在登録数)

化石	4,347
微化石	13,700
岩石	767
鉱物	1,401
大阪地下の化石	956

計) 21,171

(2) 動物部門

哺乳類・鳥類	約 530点
両生爬虫類	約 4,170点
魚類	約 2,300点
貝類	約 7,200点
甲殻類	約 1,800点
その他	約 1,600点
計)	約17,600点

(3) 昆虫学部門

標本総計 119,174点

(日本産 85,995, 外国産 33,179)

内 訳: 昭和46年 2月末まで 46年3月から 47年3月末まで

Odonata トンボ目	2,056	420
Blattaria ブキブリ目	85	3
Mantodea カマキリ目	95	4
Isoptera シロアリ目	10	0
Plecoptera カワゲラ目	60	81
Orthoptera 直翅目	1,781	96
Grylloblattodea ガロアムシ目	4	1
Phasmida ナナフシ目	58	3
Dermaptera ハサミムシ目	118	36
Psocoptera チャタテムシ目	69	10
Heteroptera 異翅亜目	14,783	773
Homoptera 同翅亜目	4,159	1,180
Neuroptera 脈翅目	96	145
Mecoptera シリアゲムシ目	380	673
Trichoptera トビケラ目	300	247
Heterocera 蛾	1,575	87
Rhopalocera 蝶	12,039	898
Diptera 双翅目	3,195	1,143
Coleoptera 甲虫目	25,746	1,603
Hymenoptera 膜翅目	3,216	630
その他一般昆虫(各目)	7,831	812

計 77,150 8,845  
計 85,995

外国産昆虫 昭和46年 2月末まで 46年3月から 47年3月末まで

蝶	13,769	125
蛾	547	31
甲虫	371	74
同翅亜目	646	2
異翅亜目	12	50
トンボ	147	1
その他	45	20
粉川氏台湾産昆虫	200	0
南太平洋学術調査隊収集品	4,700	0
田中竜三氏コレクション (日本産を含む)	12,439	0

計 32,876 303  
計 33,179

(4) 植物学部門

種子・シダ植物おしぼ標本	45,200
セン類標本	32,000
タイ類標本	22,000
地衣類標本	300
海ソウ標本	300
菌類標本	180
計	99,980

3. 文献交換状況

(1) 交換・受贈による雑誌類の受入れ状況

(3月31日現在)

博物館では研究報告はじめ、自然史研究、収蔵資料目録、Nature Study、館報などの交換として、国内外の文献収集につとめている。

昭和46年度は、アンケート配布による国内外の文献交換正常化の効果が現われてきたのと、新しく開発された交換先からのバックナンバーの到着などにより受入れ冊数の増加をみた。

年 度	受入れ冊数	冊数の累計
昭和44年度	1,866	19,530
昭和45年度	2,636	22,166
昭和46年度	3,442	25,608

(2) 研究報告の配布状況

ア. "大阪市立自然科学博物館研究報告第24号"

(Bulletin of the Osaka Museum of Natural History, No.24) (昭和45年度発行分)

国内配布数	248カ所	250部
国外発送数	69カ国	452カ所 454部
（国会図書館経由）	20カ国	264カ所 264部
（直送）	55カ国	188カ所 190部
計)	700カ所	704部

なお、国内外の配布先のうち316カ所を選んで"自然史研究" Vol. 1, No. 6を同封した。

イ. "大阪市立自然科学博物館研究報告第25号"

国内配布数	244カ所	246部
国外配布数	69カ国	457カ所 459部
（国会図書館経由）	20カ国	264カ所 264部
（直送）	55カ国	192カ所 195部
計)	701カ所	705部

なお、国内交換先については、新しく増えたところがあった一方、各大学における図書館の統合(分館制の廃止)による減もあった。

(3) "大阪市立自然科学博物館館報 No. 4"の配布状況

国内配布先	198カ所
国外配布先	3カ国 9カ所
計)	204カ所

(4) 収蔵資料目録と Nature Study の配布状況

ア. Nature Study の配布先(研究会会員配布以外)

国内	104カ所
国外	7カ国 12カ所
計)	116カ所

イ. 収蔵資料目録の配布先

収蔵資料目録は今までに3巻出版されたが、発送費の予算がつかないために、いまだ配布体制が確立していない。国内については各巻の内容に応じた配布先へ、何かの機会に持参するなどして配布している程度であり、国外については7カ国16カ所のみ直送している。早い配布体制の確立が望まれる。

### Ⅲ 調 査 研 究 事 業

#### 1. 研究体制

学芸員の絶対数不足に加え、新館建設にともなう業務増は46年度の研究活動をつよく圧迫した。学芸員の増員は今年度も実現しなかった。

#### スタッフ

千地万造 (CHIJI Manzo)	地学
両角芳郎 (MOROZUMI Yoshiro)	地学
瀬戸 剛 (SETO Ko)	植物学
柴田保彦 (SHIBATA Yasuhiko)	動物学
日浦 勇 (HIURA Isamu)	昆虫学
宮武 頼夫 (MIYATAKE Yorio)	昆虫学

#### 2. 総合調査

西宮市の自然の保護と利用に関する基礎的調査

表記の調査責任者である大阪府立大学農学部造園学教室高橋理喜男教授の依頼により、西宮市北部山地の植物相・小動物昆虫相の調査を行い、報告書を同教授に提出した。西宮市長公室から刊行の予定。参加者は瀬戸・宮武・日浦の3学芸員。

#### 3. 個別調査研究事業

千地万造 (地学)

(1) 「日本の新第三系生層序と絶対年代」のワーキング・グループ (代表者: 池辺展生) のメンバーとして、従来の情報を整理総括し昭和45年の文部省科学研究費・総研Bの成果を加えて、現段階におけるまとめを行った。(Pacific Geology, vol. 4, p.39-78, Chief Editor: M. Minato, Tsukiji Shokan Pub. Co., Ltd. 1972 Tokyo)

また、成果の1つとして、池辺展生と共同で、日本の新第三系の国際的対比について考察し、1947年池辺展生・金原均二が提案し、1948年池辺によって改められた日本の新生界の Letter nomination の廃棄を行った (松下久道教授記念論文集 p. 443-452 1971)。

(2) 「日本海底質中の有孔虫群集の分布」について紺田功 (県立奈良高校) と共同研究を行い、底棲有孔虫群集については日本海における深度分布の基本的なパターンが明らかになった。(日本地質学会第78年会で講演)

(3) 「フィリピン・パナイ島の後期新生代化石有孔虫」の研究 (継続中)。

両角芳郎 (地学)

(1) 日本の新第三系の生層序区分に関する研究

昨年度総研B「日本の新第三系の生層序区分と絶対年代による国際的対比」の研究分担者として、掛川層群の浮遊性有孔虫化石層序に関する研究をはじめ

めたが、本年度もこの研究を継続して行った。その結果、掛川層群上部に鮮新-更新世境界があることなど一定の成果を得て、Bulletin No. 26 に発表した。

(2) 瀬戸内地域中新統の貝化石群集に関する研究  
島根県仁摩町の川合層の調査を行った。

(3) 化石の型どりと複製の製作に関する研究  
新館での展示にむけて、特にシリコンラバーを使った化石の型どりに関する技術的な研究を行った。

柴田保彦 (動物学)

(1) 五島列島の両生爬虫類相

7月に渡島し、宇久・小値賀・中通・若松・奈留の各島を調べた。

(2) 九州霧島国立公園調査

「陸上脊椎動物群集の構造の比較とその保護に関する研究 (JIBP-CTS)」(昭和46年度文部省特定研究・代表者加藤陸奥雄)の研究分担者として、両生爬虫類の垂直分布と食性を調査した。

(3) 奄美大島の両生爬虫類相

1月に渡島し、主にアカガエル類の繁殖活動について調べた。

日浦 勇 (昆虫学)

(1) 日本列島生物相発達史。10月に山形大学で行われた日本動物学会・日本植物学会の合同シンポジウム「日本列島周辺の生物地理—分布型と地史—」において「分布要素と編年」という話題提供を行った。このうち、属レベルでの編年論のみを雑誌生物科学に投稿した。

(2) ハムシの分布。木元新作博士 (久留米大学) と共同で本館所蔵のハムシ科甲虫のリスト第3報を作り Bulletin に発表。

(3) フィリピン群島蝶相の生物地理。44年度に行ったフィリピン群島自然史調査の第2報としてシロチョウ科をとりまとめ Bulletin に投稿したが、印刷費不足のため次年度刊の号に見送った。

(4) 近畿地方におけるオサムシ分布の史的成立過程。谷幸三・桂孝次郎・春沢圭太郎・富永修の4氏とともに研究グループをつくり、その第1報として近畿産オサムシ全種の分布図を作製し Bulletin に発表。

(5) 昆虫化石の研究。昨年行った照来層群のカゲロウ化石について日本昆虫学会大会 (於吹田市) において共同研究者衣笠弘直氏より講演発表した。

(6) 近畿地方トンボ相基礎資料のとりまとめ。関西トンボ談話会の共同事業として表記を行ったが完成は次年度に送られた。

## 宮武頼夫 (昆虫学)

- (1) 日本産キジラミの分類と生活史の調査—近畿地方の調査はのべ13回,新しい種の追加はなかったが,分布や生活史に関する多くの知見を得た。7月に北海道へ出張し一般昆虫の採集のかたわら,キジラミの生活史の調査をすすめ,1種の未記録の host-plant を確認した。又,滞在中,北海道大学農学部昆虫学研究室所蔵の日本産キジラミのタイプシリーズを検し,全種の lectotype を指定した(近い将来に出版する予定)。

IBP の担当者からの依頼で,霧島山系で smoking により採集されたキジラミの同定を行ない,4種を確認し報告した。

- (2) 外国産キジラミの分類研究—44年度に行なったフィリピン群島自然史調査の際得られたキジラミ全種の研究を完了し,11種(2新種を含む)を Part. I に(当館研究報告25号),16種(10新種を含む)を Part. II (当館研究報告26号)に記載発表した。

6月中旬より約2週間,台湾大学農学院と共同で主として台湾中部・南部の昆虫相の調査をしたが,同翅類のうち35種のキジラミを得,20種の host-plant を確認した。資料については研究続行中である。また,名城大学農学部昆虫学研究室から借用した韓国産キジラミ(46年度採集のもの)の研究も継続中である。

## 瀬戸 剛 (植物学)

- (1) フィリピン産シダ植物の分類学的研究  
1969年に行った本館フィリピン群島調査(館報3参照)の採集品の研究を昨年に引き続き続行中。結果は当館研究報告No.27に発表予定。
- (2) 西宮地方の植物相調査  
西宮市の自然保護とその利用についての基礎調査(代表者大阪府大高橋理喜男)の調査分担者として,西宮市甲山周辺と武庫川沿岸のフロラを調査した。
- (3) 大阪の帰化植物調査  
大阪の帰化植物の種類とその消長を調査中。
- (4) 近畿地方シダ植物相の研究  
さきに第1,2報を当館研究報告16,17に発表した。その後の資料の大幅な増加により,再検討を行っている。

## 4. 研究業績一覧

(Contributions from the Osaka Museum of Natural History)

- 業績番号 研究者 “表題”, 発表誌, 巻号: 頁(発表年)
158. 木元新作・日浦勇 “大阪市立自然科学博物館に所蔵されるハムシ類標本第三報”, Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 25: 1~26 (1971)
  159. 日浦勇・桂孝次郎・谷幸三・春沢圭太郎・富永修

- “近畿地方におけるオサムシの地理的分布(予報)”, Ditto, 25: 27~42
160. Ōhira, Hitoo “Some species of Elaterid-beetles from New Caledonia (Coleoptera)”, Ditto, 25: 43~48, pl.1
  161. Miyatake, Yorio “Studies on the Philippine Psyllidae (Hemiptera: Homoptera) I.—Results of the Natural History Survey by the Osaka Museum of Natural History and National Museum of the Philippines, 1969. Part I”, Ditto, 25: 51~60
  162. Hori, Yoshihiro “Notes on some Philippine Issidae (Hemiptera)”, Trans. Shikoku Ent. Soc., 11 (2): 60~70
  163. 両角芳郎 “掛川層群の浮遊性有孔虫化石層序”, Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 26: 1~9, pls. 1~4
  164. Miyatake, Yorio “Studies on the Philippine Psyllidae (Hemiptera: Homoptera) II”, Ditto, 26: 11~34, pls. 5~6
  166. 児玉務 “近畿地方の苔類, 第1部”, 大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録, 3: 1~116.
  168. 児玉務 “近畿地方の苔類, 第2部”, 同上, 4
  169. 池辺展生・千地万造 “日本の新第三系の国際的対比と“Letter Nomination”の廃棄”, 松下久道教授記念論文集, pp. 443~452 (1971)
  170. Ikebe, N., Takayanagi, Y., Chiji, M. and Chinzei, K. “Neogene Biostratigraphy and Radiometric Time Scale of Japan—An Attempt at Intercontinental Correlation”, Pacific Geology, 4: 39~78 (1972)
  171. 日浦勇 “分布要素と編年”, 生物科学(印刷中)(他に)柴田保彦 “JIBP主調査地, 大雪山地域の動物調査報告—Ⅳ。北海道大雪山地域の両生爬虫類相”。陸上生態系における動物群集と自然保護の研究昭和45年度研究報告, pp. 51~60. (1971年)

## 既報補遺

77. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 10(2): 393~470 (1962)
89. Publ. Seto Mar. Lab., 12(1): 109~112 (1964)
119. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 16(2): 85~125, pls. 6~15 (1968)
120. Giornaledi Geologia, Bologna, 35(4): 11~25 (1969)
125. Kawakatsu, Masaharu “Report on Freshwater and Land Planarians from New Caledonia”, Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 22: 1~14, pl. 1 (1969)
140. 第2集: 121~203, pls. 11~20 (1970)
141. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 23: 25~34, pls. 5~6 (1970)
142. 竹原平一教授記念論文集中部地方の鮮新統および最新統, pp. 163~172, 1 pl. (1971)
143. 国立科学博物館専報, 3: 273~284, pls. 23~24 (1970)
144. Bull. Osaka Mus. Nat. Hist., 23: 1~10 (1970)
145. 同上, 23: 11~18, pl. 1 (1970)
146. 同上, 23: 19~24, pls. 2~4 (1970)
149. 日本鱗翅学会特別報告, 5: 73~88 (1971)
151. Mushi, 45(2): 51~58 (1971)



## IV 展 覧 事 業

### 1. 常設展

新館準備のため、大きな改変は行わず、下記を除いてほとんど昨年度どおりである。

#### (1) 水生昆虫の展示

農薬の大量使用や汚水の流入による水質の悪化で、絶滅にひんしているゲンゴロウ・タガメなど水生昆虫を3階おどり場に展示し、環境保全を訴えた。

#### (2) 案内パネルの更新と新設

見苦しくなった館内案内パネルを更新し、新館PRのパネルを新設した。

### 2. 特別陳列

#### (1) 日本のトンボ 11月16日-12月26日

日本昆虫学会大会が大阪で開催されたのを機会に、関西トンボ談話会との共催で、第3展示室で開催。

北海道から八重山群島にいたる日本から記録されたトンボの全種162種171型のうち、141種151型が出品された。これだけの種類を一堂に集めてみられたのは、おそらく日本ではじめてのことだろう。

#### (2) トリケラトプス頭部化石 2月2日-3月13日

トリケラトプスは白亜紀、北アメリカにすんでいた頭に3本の角を持った恐竜の一種。新館に展示するため、今回ロサンゼルス自然史博物館から複製を購入、組立作業が終ったので、新館での展示に先だって第1展示室で市民に披露された。

#### (3) 東洋ゾウ頭骨と臼歯化石 6月3日-9日

1971年4月、枚方で発掘されたもの、補強加工ができたので6月3日から9日まで、発掘報告をかねて2階おどり場に展示した。



#### (4) 玄関入口の展示

玄関入口正面に展示ケースを作りつけ、時々に応じたテーマで、おもに新着標本を展示している。

5~6月 大阪市大粉川昭平氏が専門の植物調査のかたわら採集、寄贈されたボルネオ産昆虫標本。

7~10月 万博し連・チリ両パビリオン寄贈の鉱物標本と、ザリガニのなかま。

11~1月 岡藤五郎氏寄贈山口県産イチョウの化石と現生のイチョウの葉のいろいろ。

2~4月 粉川氏寄贈ボルネオ産昆虫。

#### (5) 大阪市立婦人会館での展示

婦人会館1階ロビーに当館の展示ケースを1つおき当館の紹介を兼ねて展示を行っている。

5~7月 ジャガイモにみる自然の規則性。ジャガイモの芽が%の開度に配列されていることを実物と模型で展示。

8~11月 アンモナイト とくに異常巻きアンモナイトを集めて展示した。

2~4月 冬の蝶 大阪付近で成虫越冬する蝶を展示。

### 3. 特別展

新館準備のため、本年度は恒例の特別展は開催しなかった。

#### 〔付〕館外の展示会への出品

(1) 羽田空港ビル 失われた生物展(7月20日-8月20日)に枚方の東洋ゾウ頭骨と臼歯化石を出品。

(2) 枚方市教委 東洋ゾウ特別展示(6月10日-17日)発掘にあたって多大の援助を与えられた地元枚方市教委へ発掘報告を兼ねて出品。

(3) 阪急電鉄宝塚ファミリーランド恐竜博(1972年3月15日-6月4日)へトリケラトプス頭部複製ほか化石198点を出品。

組立作業が終ったトリケラトプスの頭骨

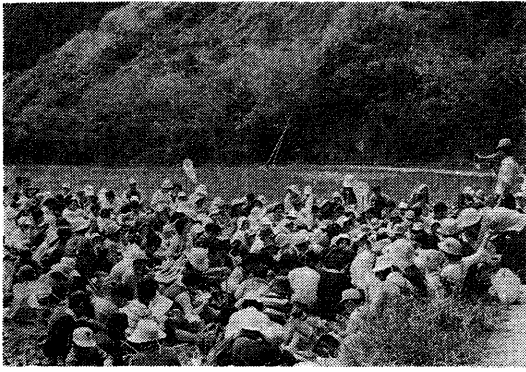
## V 普及指導事業

昭和46年度普及行事一覧表

月/日	行 事 名	場 所	外部 講師	定員	申込数	参加数	備 考
4/25	春の野原を歩く	河内長野市千早				146組 360人	親と子の自然をみるつどい①
5/9	谷川の動物しらべ	宝塚市武田尾	1	170組	333組	132組 362人	〃 ②
5/9	磯あそび	和歌山加太海岸				81組 228人	大阪自然科学研究会-1
6/6	川原の生物をみる	京都府八幡町 三川合流点			〔雨天中止〕		親と子の自然をみるつどい③
6/13	淀川の淡水魚をみる	市内旭区城北公園 北側淀川溜り			50人	30人	一般成人対象
6/13	ブナ林を歩く	金剛山西斜面				34人	大阪自然科学研究会-2
6/20	淡水プランクトンの観察	茨木市将軍山湿原				75人	〃 -3
7/4	ザクロ石さがし	二上山	1	130組	249組	62組 157人	親と子の自然をみるつどい④
7/11	明治の森を歩く	箕面東尾根				50人	大阪自然科学研究会-4
8/12 ~13	紀見峠・岩湧山の自然かんさつ	紀見峠・岩湧山				80人	〃 -5
8/29	標本同定会	自然科学博物館	20			308件 921人	
9/4	なく虫かんさつ (1)	藤井寺市道明寺		40組	182組	32組 73人	親と子の自然をみるつどい⑤
9/8	〃 (2)	〃		50組		26組 65人	〃 ⑥
9/11	虫の声をきく会	高安山			〔雨天中止〕		大阪自然科学研究会-6
9/12	南港の野鳥をみる会	南 港				30人	〃 -7
9/26	チョウの子どもさがし	奈良県北葛城郡			〔雨天中止〕		親と子の自然をみるつどい⑦
10/3	植物園見学会	市大附属 私市植物園				30人	大阪自然科学研究会-8
10/17	赤トンボのかんさつ	貝塚市三ツ松	2			85組 208人	親と子の自然をみるつどい⑧
10/24	木の実と虫こぶさがし	東能勢妙見山麓	2			50人	一般成人対象
10/31	動物園のケモノをみる会	天王寺動物園		90人		80人	〃
11/7	大阪層群見学会	明石市中八木海岸	3			73人	〃
11/21	六甲地質見学会	六甲山				30人	大阪自然科学研究会-9
12/5	動物の冬ごしかんさつ	桜井市朝倉			121組	44組 109人	親と子の自然をみるつどい⑨
2/27	冬の水鳥をみる会	伊丹市昆陽池	3	50組	34組	13組 31人	〃 ⑩
2/27	化石さがし	京都府宇治田原		60人	450人	102人	〃 ⑪
3/5	水族館見学会	神戸市須磨水族館				54人	大阪自然科学研究会-10
計						3232人	

上記行事のほか、普及活動として、口頭、文書、電話による質問の応待（約5,400件）。学校、各種研究団体、民間会社等への講師派遣（38件）。大阪自然科学研究会

（会員1,100名）の指導と育成をすると同時に、同会発行の普及誌（月刊）Nature Study（Vol. 17, No.4~Vol. 18, No.3）の編集を行った。



写真説明

- 左上(へ) 昭46.4.25 春の野原を歩く
- 右上(↑) 昭46.8.29 標本同定会
- 左(←) 昭46.11.7 大阪層群見学会

普及事業参加者数の年度比

行事 年度 項目	野外観察会			映画・講演会・その他			標本同定会			計		
	回数	延日数	参加者数	回数	延日数	参加者数	回数	延日数	参加者数	回数	延日数	参加者数
33	12	15	1,263	12	13	985	1	1	750	25	29	2,998
34	13	20	1,954	10	11	854	1	1	427	24	32	3,235
35	13	18	1,475	15	29	791	1	1	995	29	48	3,261
36	21	27	1,546	16	17	540	1	1	536	38	45	2,622
37	7	8	675	8	22	669	1	1	1,024	16	31	2,368
38	10	13	710	7	7	224	1	1	935	18	21	1,869
39	14	17	2,540	6	9	723	1	1	646	21	27	3,909
40	15	20	2,088	5	5	391	1	1	1,183	21	26	3,662
41	8	11	704	2	2	207	1	1	742	11	14	1,653
42	20	27	2,953	6	8	459	1	1	628	27	36	4,040
43	19	24	1,665	5	8	484	1	1	620	25	33	2,769
44	15	16	1,801	3	8	289	1	1	785	19	25	2,875
45	21	22	3,202	4	4	145	1	1	654	26	27	4,001
46	22	23	2,311	0	0	0	1	1	921	23	24	3,232

## VI 新館建設事業

昭和47年1月、長居公園植物園内において、かねて計画中であった自然史博物館の建設工事がいよいよ開始され、48年春の完成を目標に、目下、工事が順調に進められている。

当新館は、外壁及びポーチ床は御影石張りで、展示室・収蔵庫は無窓となっており、研究室及び管理室の窓はブロンズ仕上げとなっているほか、身体障害者専用の設備が設けられ、冷暖房設備は公害を考慮してガス方式が採用されている。

また、展示の方法としては、従来の分類学的な標本羅列方式を排し、それぞれにテーマを設定して、大阪という身近かで、具体的な自然を通じて、全地球的な自然の

生いたち、人間の営みと自然とのかかわりを、わかり易く展示しようとするところが、新館の大きな特長といえる。

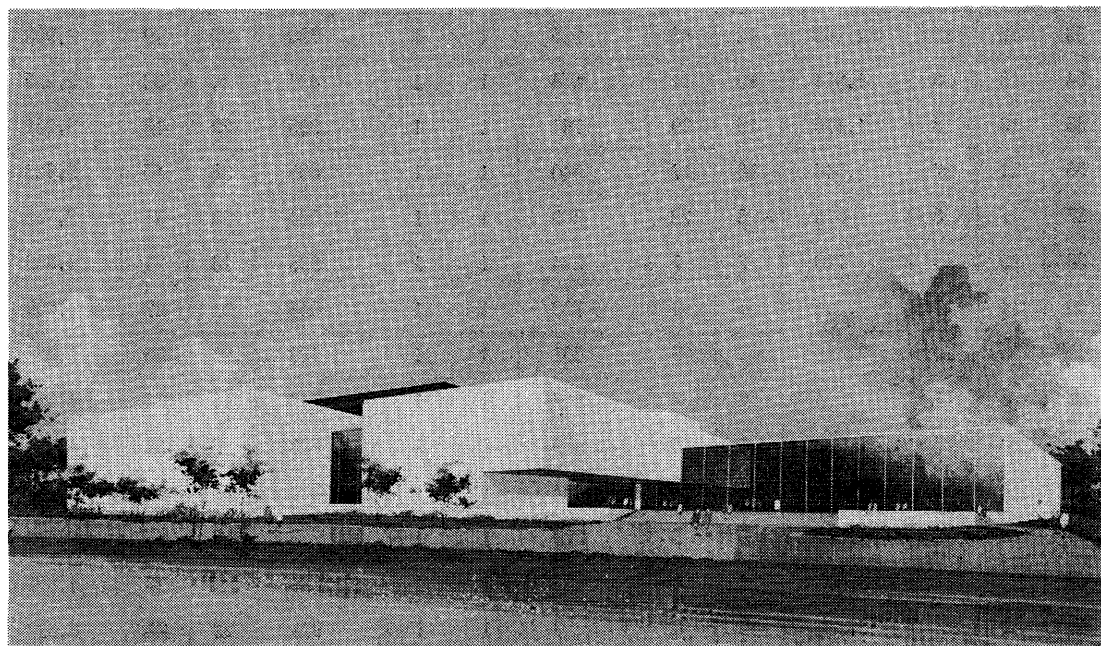
1. 名称 大阪市立自然史博物館
2. 階数 地上2階（一部3階）、地下1階
3. 延面積 6,640.75平方メートル
4. 予算 10億1千万円
5. 建設位置 大阪市東住吉区東長居町  
(長居公園、自然植物園内)
6. 施工業者 株式会社 竹中工務店
7. 工事着工 昭和47年1月21日
8. 工事竣工 昭和48年3月31日
9. 開館予定 昭和49年4月上旬

### 面積内訳

部 門 別	面 積 (平方米)
展 示 部 門	2,350.59
教 育 部 門	631.96
研 究 部 門	406.50
技 術 部 門	283.50
保 管 部 門	1,013.75
管 理 部 門	1,026.18
共 用 部 門	928.27
計	6,640.75

階 数	面 積 (平方米)
地 下 1 階	855.07
1 階	3,096.77
2 階	2,404.71
3 階	240.87
屋 階	43.33
計	6,640.75

### 完成予想図

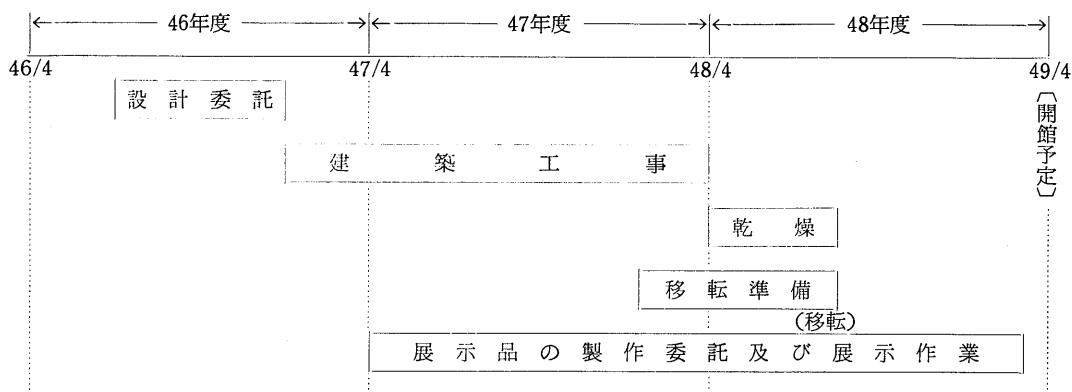


年度別事業費内訳

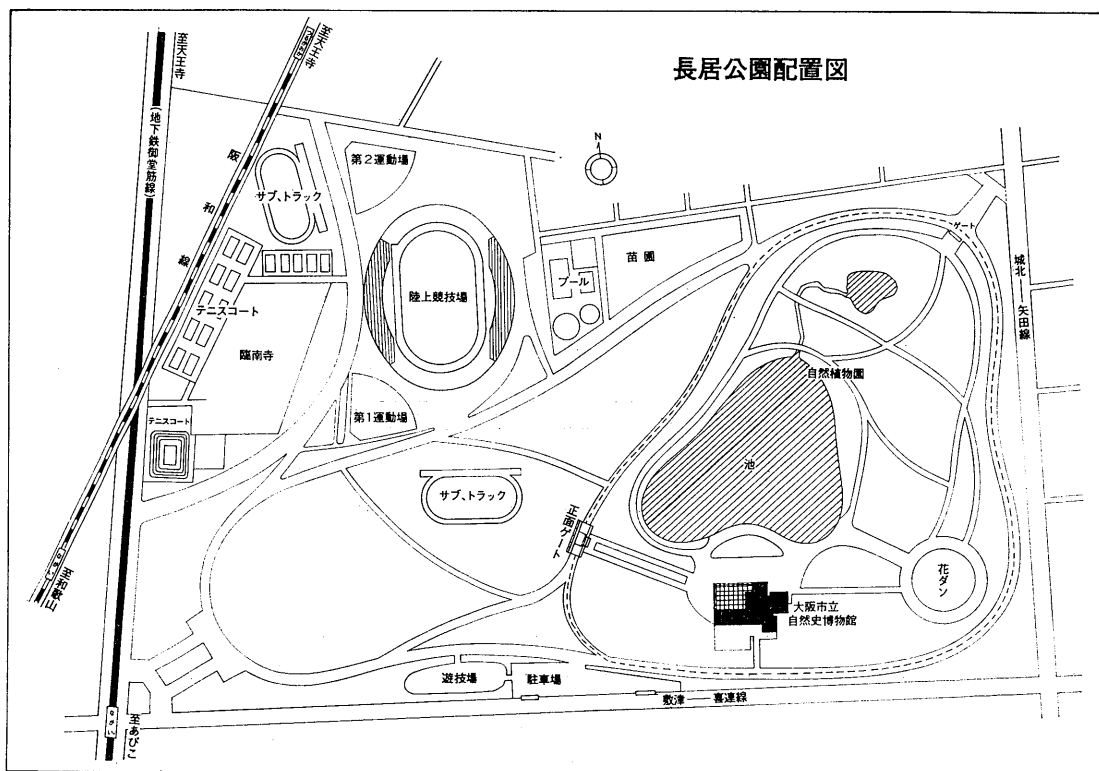
内訳	年度別			
	全体計画	44-46	47	48
建設工事費	792,000	290	791,710	0
主体工事費	476,000	290	475,710	0
設備工事費	316,000	0	316,000	0
建設に伴う事務費	30,000	18,466	11,534	0
設計委託費	16,500	16,500	0	0
監理委託費	11,200	466	10,734	0
設計監督費	2,300	1,500	800	0

内訳	年度別			
	全体計画	44-46	47	48
内部設備費	150,000	5,184	11,066	133,750
調査委員会費	1,450	1,450	0	0
移転撤去費その他	36,550	4,200	0	32,350
計	1,010,000	29,590	814,310	166,100

工事工程表



長居公園配置図



---

# ANNUAL REPORT

of the

Osaka Museum of Natural History

for the year

1971

Utsubo Park, Nishi-ku, Osaka, 550 Japan.

---



---

ANNUAL REPORT

of the

Osaka Museum of Natural History

for the year

1971

Utsubo Park, Nishi-ku, Osaka, 550 Japan.

---